

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 85 号
2013年6月

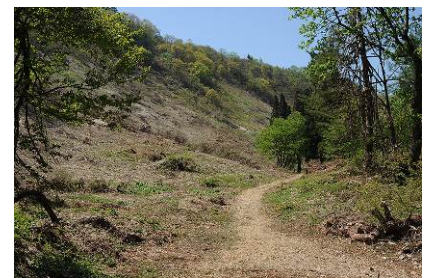


今年も楽しんだ斜平山観察会 山内幹夫

3年続けて米沢市斜平山観察会は天気に恵まれました。これはネイチャーフロント米沢さんと高山の原生林を守る会の皆さんの強運が合わさった効果かなと思っています。僕も3年続けて観察会に参加しています。一昨年の5月に初めて斜平山に登ったときの印象は最高でした。空気が綺麗で新緑も眩しく自然が豊かで、それ以来米沢方面の自然に魅せられました。

斜平山の印象は雪崩地形の山肌とオクチョウジザクラ、ユキツバキ、キバナイカリソウ、そしてカタクリやキクザキイチゲ、アヅマイチゲ、キバナノアマナ、オトメエンゴサクなどの群落です。一昨年は七曲りの坂を登っての稜線歩き、昨年は愛宕神社に登っての稜線歩きでしたが、今年は中腹のスプリングエフェメラルズを心ゆくまで堪能できました。いずれもGW明けの日曜日に観察会が企画され、雪融け直後の花が咲き乱れるベストタイミングでした。

今年の観察会は大森山森林公園に高山の会とNF米沢併せて20名が集まりました。ミーティングの後に出発しましたが、すぐにヒメヤシャブシの花を見つけて観察が始まり、登り道沿いでも頻繁に立ち止まってオクチョウジザクラやユキツバキなどの観察を始めるものだから、目的地に着く頃には夜になってしまうのではないかと心配になりました。それでも何とか斜平山中腹に辿り着きました。中腹は雪崩によって形成された斜面の麓で雪融け直後は草丈も低く広々とした感じとなっています。日差しが強く汗ばむ陽気だったので木陰で休憩したら、あたり一面がお花畑のように咲き乱れています。ピンク色のアオイスミレも咲いていて、一同驚きの声を上げました。ピンクのア



斜平山急斜面



雪崩のデブリ

オイスミレは初めての出会いなのです。中腹に咲き乱れる花々のなかでオトメエンゴサクはとりわけ印象的でした。昨年まではエゾエンゴサクと呼んでいたこの花、最近はオトメ……と呼ぶようになったそうですが、何となくオトメのほうがロマンチックでいいですね。花に顔を近づけると素敵な甘い香りが感じられ、まさに清純な乙女を想わせる延胡索だなあ〜というイメージでした。佐藤守さんに教えられてシロバナオトメエンゴサクをも見ることが出来たのはまさに幸運でした。

今年の斜平山は雪崩の脅威も僕たちに教えてくれました。雪崩が山の斜面を削って出来たトレンチや、雪崩に押し出された土混ざりの雪、そしてなぎ倒されたばかりの杉の木立、これらは雪崩のパワーをいやおうなく見せ付けてくれます。現地に立つと、本当に恐ろしさを感じますよ。雪崩に削られて押し出された土から伸びたカタクリの花が咲いているのには驚きました。野生植物の力強さですね。毎年繰り返す雪崩を経ながらも春になると花が咲き乱れる自然の力強さをここに感じます。もうひとつ驚いたこと、それは中腹の緩斜面一面に広がったヤマトリカブトの大群落でした。これはものすごいです。福島の高妻連峰山麓ではオクトリカブトばかりですが、斜平山ではヤマトリカブト。この分布の違いは興味が深まります。もちろんヤマトリカブトも全草猛毒。しかし秋に一面青い花が咲き乱れる光景を思うと、今年の秋にもう一度ここに足を運んで咲き乱れるトリカブトの花を眺めたくくなりました。

高山の原生林を守る会の今年の観察会は、4月の小鳥の森そして5月の斜平山と、スプリングエフェメラルズとの出会いに恵まれました。4月の小鳥の森では花が終わりかけていたカタクリも斜平山では今が盛りと満開でした。幸運にも春を2度楽しめたことになります。参加者の皆さんは随所で様々な花との出会いを満喫されていました。僕は斜平山中腹トレッキングコース脇をヒメニラの花を求めて歩きました。皆さんそれぞれデジカメに思い出を記録されています。僕もこのような素敵なフィールドに来ると撮影カット数が膨大になってしまいます。つくづくデジカメのありがたさを感じました。

それにしても楽しい一日を皆さんと共に過ごすことができました。観察会の終わりがちにNF米沢代表の方が「斜平山は米沢の宝です」とおっしゃっておられましたが、まさにその通りだと思いました。



デブリ上のカタクリ



キバナノアマナ



シロバナオトメエンゴサク



キバナイカリソウ



アオイスミレ



ヒメニラ

小鳥の森自然観察会に参加して

松井貞子



春たけなわの4月14日、久しぶりに高山の会の小鳥の森観察会に参加し、楽しい時を過ごすことができました。高山の会の皆さんは植物の名前、生態を詳しく説明してくださるので、私は今まで何気なく気にもかけず見過ごしてきたものが、名前が分かり、生態がわかることで、身近なものに感じるようになり、自然に近づいたような気がしてうれしくなりました。

カタクリの花は群生しかわいい。アリの種を運びその一翼を担っている。ショウ

ジョウバカマは林のあちこちに点在して咲いていた。何年かしたらカタクリのように群生するのかなと思いました。スマレも10種ほど観察できました。葉が目立たなくて花が地面からでてきたようなアケボノスマレ、注意してみないと見つけることのできないような小さな花のフモトスマレ、道路の隙間にめりこんで咲いているノジスマレ、どれも一生懸命咲いていました。

歩道に沿って、イノシシがミズを食べるために掘り起こしたと思われる跡が続いていました。こんなところまでイノシシが増えているのかと思うと自然の変化が気になりました。

小鳥が鳴き、山野草が咲き、落ち葉を踏みしめて、林の中を歩くことの心地よさを皆に知ってほしいし、気軽に来たいと思いました。

でも佐藤さんが放射線量をとところどころで測ると「1.3」「1.8」とか「1」以上ある。孫を連れて遊びに来れるのはまだ先のことか……腹立たしい。



カタクリ



アカネスマレ



ノジスマレ



フモトスマレ



マキノスマレ

オオバヤシャブシの雌花

鎌田和子

木の実が落ちていると、その形や色合いに惹かれ、つい拾ってしまいます。以前、ヤシャブシとヒメヤシャブシの果実を眺めているうちに、これが頭で、これは胴体、ここに手足をつけたらロバさんになったよ、と楽しだこともありました。「小鳥の森」のオオバヤシャブシの果実は大きくてきれいなので、訪れるたびに拾って帰ったものです。その頃は、ヤシャブシもオオバヤシャブシも果実が似ていると思うだけで、それぞれの果実のつき方に違いがあるなど、気づきもしませんでした。ずっとあとになって、「ヤシャブシは通常2個、オオバヤシャブシは1個ずつつく」ということを図鑑で知りました。

当会の4月の観察会は「小鳥の森」です。観察会のテーマは「スプリングエフェメラル」。けれど、私の関心はオオバヤシャブシの冬芽です。そのわけは、2月に水林公園でアカシデの折れ枝を拾ったことに始まります。その折れ枝にはアカシデの冬芽がびっしりついていました。ちょっと太ったのやら細いのやら。まるで神様が、「アカシデの花を見たいなら、まずは冬芽の観察から始めよ！」とでも言っているようでした。図鑑を繰ると、「大きな冬芽には雄花序が、細い冬芽には雌花序か葉が入っている」とありました。クマシデ属の冬芽はみなそうらしい。特にアカシデは、「花も葉も小形で端正。日本的な趣がある」という。そんな日本情緒あふれるアカシデの花を見逃さないようにしなくては…と、思う一方、観察会でよく見かけるツノハシバミの雄花は、冬芽のうちから雄花であると分かるけど、あれは何科の何属？とどんどん図鑑をめくっていったら、オオバヤシャブシの冬芽に関心が向いたのです。

春、「小鳥の森」を歩いていると、黄緑色の、太くて大きい毛虫のようなものに出会ってびっくりしたものです。いつの頃からか、それはオオバヤシャブシの雄花が落ちたものだとは知っていますが、これまで雌花は？と気になったことなど一度もありませんでした。果実を拾いはしても、雌花を意識したことがなかったのです！かくして、今回の観察会はオオバヤシャブシの雌花観察のチャンスとなったわけです。オオバヤシャブシの雌花の冬芽は芽鱗に包まれ、雄花より上についているという。それをしっかりこの目で確かめようと思いました。

ところが、一次下見の帰りがけに拾った果実！オオバヤシャブシの木の下で拾ったのに、図鑑の解説と異なる果実のつき方をしていました(写真①)。どうしてなの！？戸惑いつつ、その果実を手にしたまま、ネイチャーセンターへの道を下りました。すると、「森の案内人」さんが、「オオバヤシャブシですね。」と声をかけてくださいました。けれど、私の頭の中には、オオバヤシャブシは果実が1個ずつつくという解説が入っているものですから、納得がいきません。あれこれ考えを巡らしました。オオバヤシャブシの木の近くに、こんな果実のつき方をするハンノキがあったのかな？ 引き返してハンノキを探す？ でもハンノキかどうか見分けられる？ 何も資料をもってきてないよ…。釈然としないまま、その日は帰りました。帰ってから、手持ちの図鑑を全部調べました。何冊めかに、写真①とよく似た果実を見つけました。ミヤマヤシャブシ(写真②)。これだ！と声を上げました。果実が4、5個まとまってついている形状が、私の拾った果実とソックリに見えました。「小鳥の森」のあの辺りにミヤマヤシャブシが混じっているのでは？

そして、4月7日、会の代表Sさんと一緒に、ホントの下見の日を迎えました。謎の果実の親木を探すべく、オオバヤシャブシの木の下に立ちました。目線は、枝に残っている昨年の果実へ…。なんと、果実は図鑑の解説どおり、1個ずつついていました。が、よく見ていくと、同じオオバヤシャブシの木の枝先に、果実が4、5個まとまってついているではありませんか。……オオバヤシャブシなのに、どうして、どうしてなの！？「う～む、交雑種？」「まさか！」「ミヤマヤシャブシかも、なんて期待したけど…、違うわね。」「ミヤマヤシャブシはここには植生していません。あったら大発見です。」それぞれが思いつくことを口にし、首をひねったのでした。

一週間後の観察会で、Sさんは、オオバヤシャブシの果実のつき方に変異があることに気づいたとき、それはどうしてだろう？と考えることが大事であって…と、参加者に話していました。それから、オオバヤシャブシの果実の変異がどうして起きたのか、Sさんは猛暑の影響ではないかと、話してくださいましたが、詳しいことはその場ではよく頭に入りませんでした。

その3日後、桑折町の半田沼周辺を歩いていたら、そこにもオオバヤシャブシがありました。それがなんと、「小鳥の森」のオオバヤシャブシと同じような果実のつき方をしていたのです。半田沼のオオバヤシャブシも猛暑で変異したってこと！？猛暑だと、どうしてオオバヤシャブシの雌花が変異するのでしょうか？Sさんにメールし、詳しく説明してもらいました。Sさんの解説によると、「今年観察している果実は、2011年に花芽が分化したものであること。2011年は夏場に高温乾燥が続いたので雌花が多く分化し、しかも雌花と雌花の間隔(節間)が詰まったために、見かけ上、穂のように見えるのではないか。不良環境になるほど、子孫を多く残す方に樹の営みが適応したものと考えられる。2012年も高温乾燥だったので、来年も同様の現象が起こるかもしれない。」というのです。なるほど！種の保存のためにそういう営みが起こると聞くと納得がいきます。

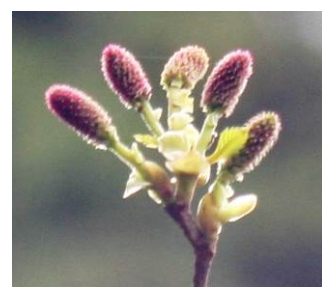
とすれば、もうすでにオオバヤシャブシの雌花は分化しているはず。よく観察すれば、新しい穂状の雌花が見つかるかもしれません。翌日、「小鳥の森」へ急ぎました。「オオバヤシャブシの葉が大きくて、雌花が隠れて見えないなんてことはありませんように…」と、願いながら石段を上り、オオバヤシャブシの枝々に目を凝らすと、……Sさんの推測どおりの、穂状の雌花が突き出ていたのでした(写真③)！！謎の果実は、この穂状の雌花が結実したものということなのでしょう。オオバヤシャブシの果実の変異に惑わされ、当初の目的のオオバヤシャブシの雌花観察をすっかり忘れていました。が、謎の解明の糸口はオオバヤシャブシの雌花の観察にあったのでした。だいぶ回り道をしてしまいました。これって、やっぱり神様のしわざでしょうか！？(2013.4.24)



① オオバヤシャブシの果実なら1個ずつのはず…？



② これかも！似ているよね。



③ 穂状の雌花

鹿狼山から 25 ～被災地の開発～

小幡 仁子

私の住む新地町には仮設住宅が数カ所あります。大津波により家を流された沿岸部の方々が住んでいます。また、福島第一発の放射能汚染から逃れ、この新地町の仮設住宅に住んでいる方もいます。東日本大震災から2年が過ぎ、町では災害公営住宅事業や防災集団移転促進事業が始まり、あちこちで大型重機の音が鳴り響き、大型トラックが往来しています。鹿狼山に登ると、宅地造成の赤土部分が点々としているのと、常磐自動車道新地 IC の工事現場が真下に見えます。常磐線新地駅は流され、相馬－浜吉田間は電車が走っていません。新しい線路は 6 号国道沿いに作り、前の線路は土砂を嵩上げして道路にする計画です。堤防と道路を作り、津波に対して二重に備えることになっています。そして、宅地や被災した沿岸部の開発には大量の土砂が足りないのです。横浜市と協定を結んで、横浜市の公共工事で発生した土砂を提供してもらうことになりました。工事はどんどん進んでいるので、来年になれば新地町もずいぶん様変わりすると思われます。

震災前ならば、森林がなぎ倒され赤土がむき出しになったり、遠いよその地区から土砂が大量に運ばれたりすることに、違和感や不安感を持ったかもしれません。かなりの自然破壊だし、よその地区の土砂にはこの土地にはない様々な種子が混じっていることでしょう。自然への悪影響が考えられます。しかし、今の状況を見る限り、この町が選ぶ道はこれしか無いのだという気がします。沿岸部は危険区域に指定され、人は住めないし、1,000人を超える方が移転しなければなりません。常磐自動車道も、福島第一原発の放射能汚染で原町 IC 以南はいつ開通になるか分かりません。しかし、この地方が置き去りにされないために、仙台まで早急につなぐ必要があるのだそうです。人は考える余裕も時間も無く、現実には押し流されて行くようです。

応急仮設住宅の住んでいる方の話を聞くと、冬は結露がすごくて、毎朝起きるとまずタオルで拭くのが日課であるとか、薄い壁1枚だけで隣の家と仕切られているので、大きい音を出さないように気を遣いながら生活しているとか聞きました。そんな仮設の生活から抜けて、早く以前のように自分の家で気兼ねなく生活してほしいとは誰もが思うところです。町の広報には、毎月のように住宅造成の記事や新しい団地のプランが載っています。

さて、最近、町内に家を新築し、仮設を出た方々もいます。5軒以上でまとまれば、優先的にガスや水道の工事をしてくれるそうです。ただ、誰と一緒にまとまるかが大きな問題であると聞きました。誰でもお隣には気の合う方に来てほしいでしょう。まとまるのも様々な思惑が絡み大変なようです。また、家を建て住んでみると、今までとは違う地区の習慣というものがあり、入った方も受け入れる側も戸惑いがあるそうです。沿岸部では漁師や民宿等で生計を立てていた方が多く、山側に住み田畑を耕してきた農業者とは気質が違うのでしょうか。今までは田畑に堆肥を置きっぱなしにしている、みんながお互い様だからということで、文句も言われないで過ごしてきたが、これからはそういかないだろう、臭いとカブが来るとか言われそうだと等、心配しているのです。

考えてみれば、人口8,000人余りの小さな町ですが、15の行政区があり、地区毎に神社や集会所がありました。お祭りや行事、隣組との関係もありました。人間関係が希薄になりつつある昨今ですが、まだ地区のコミュニティは生きていました。今回の震災でも、おおよそ、地区ごとの仮設住宅があり、地区のコミュニティが失われないように配慮されています。住宅地の造成が終わり、家を建てて移転したら移転先の行政区の一員となるわけですが、どのようにコミュニティは変化していくのでしょうか。仮設住宅の不自由な生活が終わり、引っ越しができれば元の暮らしに戻るかというとそうでもないようです。地区で近隣の人々と安定した関係を築きながら住むには時間もかかるでしょう。また、いろいろな面で折り合いをつける必要があります。(2013.6.12 記)



鹿狼山から見える造成地



狭い仮設住宅



宅地の造成が進む町の様子

東北ブナ紀行 (50)

奥田 博

東北ブナ紀行は今回で50回目を迎える。大震災以降は「線量計を携えた山旅」として9回を数えた。原発事故については、まだまだ言いたいことはあるが、ここで区切りを付けたいと思う。今回から本来のブナ紀行に戻します。ホームページ上では、9回の「線量計を携えた山旅」と「東北ブナ紀行」を分けて、ブナをシリーズで読めるようにしたいと思っています。

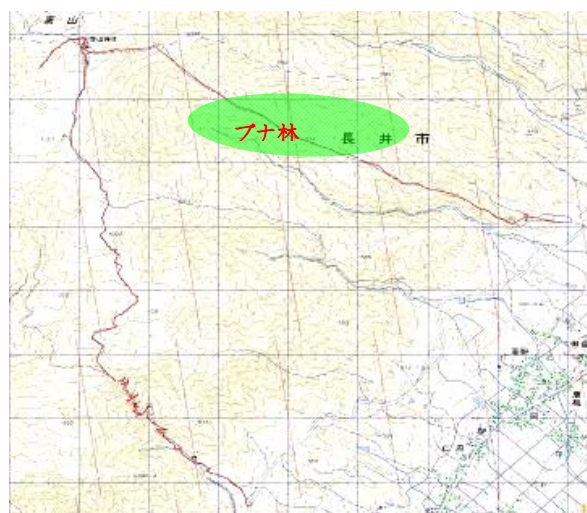
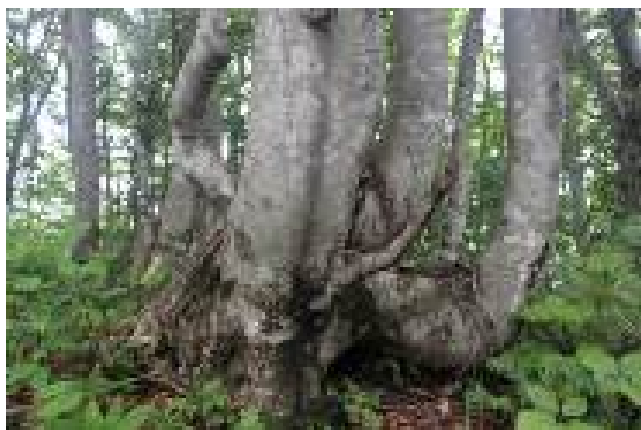
さてブナ紀行は青森県・秋田県・岩手県そして山形県まで来て中断された。山形県から再開したいと思います。山形県には有名な葉山が2山あります。それぞれの町の名前を冠して、長井・葉山、村山・葉山と呼ばれています。

81) 長井・葉山

長井市から登る葉山は、朝日連峰東端の山である。近年は、ここから大朝日岳まで縦走する登山者も少ないようで、道は藪に覆われる個所もあるという。葉山山頂までの道は、多くの登山者に踏まれている。

キャンプ場の奥の鳥居が建つ登山口から歩き始めるが、いきなり急坂が始まる。尾根に出れば、すぐにブナ林の中を歩く。ブナとしては、そんなに太くもなく、二次林にも見える個所がある位だ。アガリコのような人の手の入ったブナが散見されるので、利用されていたのだろう。この辺がブナのいいところ。登りが落ち着くと、山頂神社に近いが、ブナの森はなくなってしまう。コースタイム: 登山口 (30分) 尾根ブナ帯 (2時間10分) 山頂尾根 (30分) 葉山神社山頂

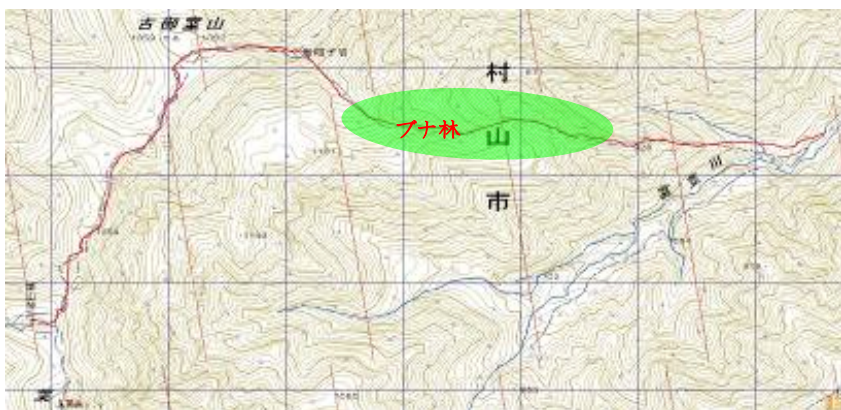
(写真) アガリコのようなブナ



82) 村山・葉山

村山の葉山は、西側の十部一峠から登るのが、最も短くブナの純度も高い。このコースは次号で項を改めて紹介したい。しかし村山側のコースも、ブナの出来という点では峠コースといい勝負だが、山頂までのコースが長いことで、健脚向きといえる。登山口から急坂を登り尾根に上がると、見事なブナが現れる。尾根をたどりながら太いブナ、大らかに伸びる枝、形の面白いブナや太陽光に輝く葉などをファインダー越しに覗くと心が落ち着いてくる。途中の清水では、太いブナの下で、しばし休みをとり、ブナの周囲を流れる風を感じる。なんと至福の時だろう。暑い日は、木陰が涼しくて、いつまでも休んでいたいくらいだ。山頂から北東に延びる尾根(古御室山)に出れば、一転して展望とお花畑となる。

コースタイム: 登山口 (30分) ブナ林 (2時間) 尾根烏帽子岩 (1時間 30分) 葉山神社



(写真) オアシスとなるブナの木陰

ウスバスマレ (*Viola blandaeformis* スミレン科スミレ属)

亜高山帯の針葉樹林に植生する多年草。スミレ類の中では最も標高の高い山域に生育する高山性スミレで日本固有種。スミレサイシン、ミヤマスマレ同様に地上茎の無いスミレ類に属する。吾妻連峰では山頂部付近で多くみられるが、安達太良連峰では今のところ植生が認められていない。種小名は「blanda 種の形をした」という意味。blanda 種は北アメリカ東部産の香りのある白花種で、葉と花の姿が似ている。

葉の表面は無毛で滑らか。裏面は光沢がある。葉形は円で先端は尖らない。周縁部は浅い切れ込みが入り、その切れ込みがフリル状に折り重なる。葉の基部は襟状に立ち上がる。葉色は明るい緑色を呈し、端整な葉形と相まって葉群の姿は爽快で、その景観は観葉植物に匹敵する。葉質は薄く、柔和で繊細な印象があり、これが名前の由来となっている。

花は小型で側弁基部の毛は無い。花色は純白で唇弁に紫の条線が入る。距も花弁と同色で短い。雌しべの花柱先端はふくらみが少なく下に曲がる。花はツボスマレに似るが、ツボスマレと比べて唇弁の条線は分岐が少なく単純で数も少ない。また距はツボスマレより立ち気味である。開花時のウスバスマレの姿は余計な装飾を捨て、白を際立たせた簡素な花とリズムカルな曲線に縁どられた葉のバランスが絶妙である。

数か年に亘って高山の植生調査に集中した時期があった。基本的な植物リストが整い、希少種を確認する踏査を繰り返していた夏のある日、未確認であった高山のヤエハクサンシャクナゲの自生地を特定しようと高山に登った。急坂も一段落し、ほどなく頂上にたどり着くと安堵した視線の先に、白い花が目にとまった。ウスバスマレであった。その頃の私の認識では、ウスバスマレは東吾妻や西吾妻に植生しているものとの思い込みがあったので発見の喜びは格別であった。以来、何度かウスバスマレを確認しているが、葉と花の美しさで、初見時のウスバスマレを超える株にはまだ出会っていない。その日は首尾よく、目的のヤエハクサンシャクナゲも確認することができた。



キバナノコマノツメ (*Viola biflora* スミレン科スミレ属)

ウスバスマレと並ぶ高山性のスミレ。分布域はウスバスマレと異なり、草地や砂礫地、沢沿い等に植生する。ウスバスマレ同様、安達太良連峰では見られない。吾妻連峰ではウスバスマレより植生域が限られ、谷地帯を境界として西吾妻連峰に分布する。種小名は、「bi(2) + flora(花)」で、2つの花を意味する。欧米名も「twoflower violet」である。キバナノコマノツメの根茎から伸びた葉茎には2輪着生することによって由来すると思われる。

葉は有毛で、薄く光沢はない。葉形は団扇をつぶしたような腎円形で葉の基部は心形で、折り重なるように巻き込む。葉縁には波状の鋸歯がある。葉の形が牛の蹄に似ていることが名前の由来。スミレの名がつかない唯一のスミレ(交雑種にムラサキコマノツメがある)で、それほどに葉の形が群を抜いてユニークであることを示している。地上茎を有し、条件が良いところでは大株になる。

花は腋性で匍匐する地上茎の葉腋から花柄を伸ばして1輪の花を着生する。花弁は側弁が上弁に重なるようにめくれ上がり、大きい唇弁を際立たせている。唇弁は下部が膨らみ先端はやや尖る。唇弁には紫がかかった褐色の条線が平脈する。条線はあまり分岐しない。側弁基部は無毛である。雌しべの花柱先端は二つに分岐する。

キバナノコマノツメを初めて見たのは飯豊山であった。他のスミレ類とは明確に異なる独特の外観をしていることと併せて、飯豊山の雄大な山容と草原が重なり、本種は孤高のスミレの印象が強い。梅雨の晴れ間となった休日に、納涼と植生調査を兼ねて谷地帯の沢を遡行した。沢とは言え、支沢の出合は開けており、初夏の強い日差しが残雪の留まる沢辺を照りつけていた。イワナシの花は盛りを過ぎ、ミヤマカタバミとともにミヤマスマレやオオタチツボスマレが見頃の季節を迎えていた。沢の中州で流木の間から黄色いスミレがのぞいているのを見つけた。その時が吾妻でのキバナノコマノツメとの初見であった。発見の喜びと同時に、飯豊の草原に咲く孤高のスミレが日照条件に恵まれない沢筋に咲いていることに意外な思いがした。分布域がミヤマスマレと重なっていることも新たな発見であった。



西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(NF 米沢と共同:詳細は佐藤守まで)

1. 実施日:6月23日(日)6時30分～17時30分(雨天時6月30日に順延)
2. 定員 :10名(山岳での行動において自己管理のできる方)
3. 内容 :天狗岩～西吾妻避難小屋湿地帯(Aコース:6名)と西大巔水場周辺(Bコース:4名)の誘導ロープの設置作業を行います。
4. 集合場所・時間:福島県果樹研究所 6時30分
5. 参加費 :1000円(ゴンドラ・リフト代の1部を負担願います)
6. 申し込み:6月21日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

第129回自然観察会案内:滑川薬師森・新緑と夏の山岳植物観察会

日時:2013年7月7日(日)7:00～15:00

集合場所 福島県果樹研究所

集合時間 7:00 参加定員 20名

内容 滑川温泉から吾妻・薬師森までを踏査し、夏の山岳植物を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

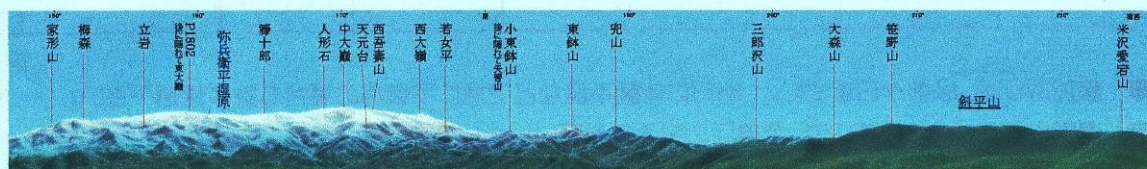
*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(300円)

申し込み:7月6日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

吾妻山への恩返し 高層湿原の植生回復・自然観察会

主催:ネーチャーフロント米沢(詳細は佐藤守まで)



~~~~ 植生回復ボランティア作業(弥兵衛平湿原) ~~~~

- ◆ 第一回採種作業(種採り) 8月18日(日) 荒天時の予備日 8/24
  - ◆ 第二回採種作業(種採り) 8月31日(土) 荒天時の予備日 9/1
  - ◆ 播種(種まき)・緑化ネット被覆・防霜用むしろかけ作業 9月28日(土) 荒天時の予備日 9/29
- 締切 8月1日 (森林管理署・環境省への届出のため、早めの締切りになります)  
いずれも7時20分ロープウェイ湯元駅集合 帰着は17時頃  
参加費 1000円(保険・ロープウェイ・リフト代込み)  
東大巔近くの弥兵衛平湿原まで登山をして、植生回復用の採種、播種作業を行います

◇湿原観察会(弥兵衛平湿原) 8月4日(日) 参加費 2000円 締切日 7月29日

新年度の会費納入をお願いします:郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第85号 2013年6月発行  
編集・発行:高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>  
代表連絡先:佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)  
郵便振替:02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」  
入会方法:年会費(500円)を添えて上記まで  
編集:佐藤・奥田・鈴木